

隱居志願

男性自身シリーズ

山口 瞳



隠居志願

男性自身シリーズ

山口 瞳



新潮社

隠居志願（いんきょしがん） ■男性自身シリーズ 10

昭和四十九年八月二十日 発行 昭和五十五年十月十日 五刷



© Hitomi Yamaguchi, Printed in Japan, 1974.

著者——山口瞳（やまぐちひとみ）

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 郵便番号*二六

電話*業務部 東京（〇三）二六六—五二二

編集部 東京（〇三）二六六—五四二

振替*東京四八八

印刷所——株式会社金羊社 製本所——大口製本株式会社

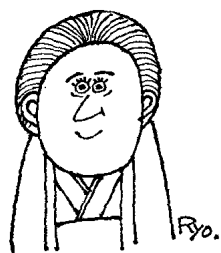
*乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

■定価八八〇円

隱居志願
*
目次



女房の母	庭の出来事	愛校心について	軽井沢	紙飛行機	百万円	野球の話	昼猶闇き	七里ヶ浜の哀歌	松本	昇仙峡	押し寄せる春	春宵一刻
69	64	59	54	49	44	39	34	29	24	19	14	9



ペンキ塗りたて	134	大関貴ノ花	129	小さい海	124	饒舌	119	万年筆その後	114	旅行鞆	109	第二梯団	104	東京に来て思うこと	99	なるようになれ	94	才能について	89	漠たる不安	84	御岳	79	斜乱視	74
---------	-----	-------	-----	------	-----	----	-----	--------	-----	-----	-----	------	-----	-----------	----	---------	----	--------	----	-------	----	----	----	-----	----



魚河岸の賑わい	199	地震・雷・火事	139
ばあばあ	194	古今亭志ん生	144
火事	189	巨人・阪神	149
いわゆる罐詰	184	隠居志願	154
夜ふけと梅の花	179	八百長事件	159
名人	174	日本腰巻文学大賞	164
社内旅行	169		

週間日記	264
いっぺんに春	259
口山人	254
職人仕事	249
最後の一兵	244
雲南四川踏査記	239
四十にして建つ	234
春の雨	229
競馬いろいろ	224
温泉場で	219
初場所千秋楽	214
雪の降る日	209
雪待ち	204

カ装
ット 嶺
柳
原
良
平

隠 居 志 願

■ 男性自身シリーズ
10

春宵一刻

今日は四月十二日で木曜日である。いまは朝である。

この日にこの原稿を渡さなければならぬ。私はすっかり忘れていた。前日に柳原良平さんに電話をして挿画の打ちあわせをすることになっている。それも忘れていた。こんなことは、十年続けていて初めてのことである。そこで、柳原さんに電話をして、昨日の出来事を書くからと言って昨日の話をした。

昨日の出来事について書いたことは何度かある。私の書くものは、いわば、すべて昨日の出来事である。しかし、昨日の出来事を今朝書くというのは最初の経験である。これを恥とする気持と、それも一興という気持が相半ばしている。

朝、起きてみると、うちではいちばん広い部屋に、将棋の佐藤義則五段が寝ているのがわかった。それで、佐藤さんを連れてきたことを思いだした。それから、目が痛い。痛い。うえに痒い。全体に目が潤んでいる。私は、昨日、泣いたことを思いだした。私は、昨日、



三度泣いた。本当に泣いたのと酔い泣きとが半々ぐらいで、酒を飲まなかったら泣かなかったかもしれないし、泣くようなことがなければ、あんなに飲まなかったかもしれない。だから、宿酔^{ちゅうすい}である。宿酔のひどいときは、すぐには症候があらわれない。朝なんか早く目ざめてしまつて気持ちがいくらいのものである。とにかく、大酒を飲めば、ぐっすりと眠る。だから気分がいい。しかしながら、宿酔は宿酔なのであつて、胃は荒れているし、血液のなかにアルコールが残っている。そのうちに発作がくる。そこで、発作のくるまえに、ビールでも飲んで、いそいで原稿を書かなければいけない。

*

昨日、四月十一日は、将棋の名人戦の第一局の二日目であつて、恒例のファン・サービスの観戦が行われる。それは、午後一時から終局まで行われる。ところが、四月十一日は大安であつて、午後一時から東京プリンスホテルで競馬の騎手の中島啓之さんの結婚式が行われる。四時半からは東京ステーションホテルで高橋義孝先生の次男の湛^{しずか}さんの結婚式が行われる。

そこで、名人戦のほうにちょっと顔を出して、結婚式に出席するつもりで家を出た。放送作家の安倍徹郎さんが一緒である。安倍さんは初段である。私は四段である。最近の戦績は私の一勝二敗であるから、私の四段がどんなものであるかを察知されたい。女房も一緒である。

渋谷へ出て「東横のれん街」というところで大阪寿司の折詰を五箱買った。これは安倍さんと共同出資である。その程度の金はいわねえものかもしれないが、二人で金を払った。どうしてそんなことをしたかというと、こんどの名人戦の二日目は夕食休憩な

しで行われる。すると終局が八時頃になる。中原名人はともかくとして、挑戦者の加藤一二三八段は神武以来の長考派であつて、ひょっとすると九時までかかるかもしれない。そうすると指している当人たちはいいとしても、控室にいる諸先生方、連盟事務局の人たち、報道関係者は腹が減つてしまふ、と考えた。そういう、つまりは余計なことを考えるので、仕事がかどらないし、将棋も強くない。

「東横のれん街」には四軒の寿司屋がならんでいた。三軒かもしれないが私には四軒に見えた。安倍さんは、この四軒のなかに一軒だけうまい家があると言つた。どの店ですかと訊くと、忘れてしまつたと言ふ。いままら、そんなことを言われても困るのだ。寿司屋の前で、安倍さんは、目を閉じて、独特のポーズで長考に入つた。時間が無い。まさか一番うまい寿司屋はどの店ですかと店員にきくわけにもいかない。

そこで、もっとも見場のいいのを注文すると、その折は、詰めるのに二十分ぐらいかかるという。それではとてもまにあわないので、すでに詰めてあるもので見映えのするものを五箱注文した。ところが、詰めてあるのは四箱分であつて、もう一箱はこれから詰めるのだということがわかつた。もう変更は許されないと思うところが私の気の弱さであつて、結局は十分間も待たされた。

その寿司の折を対局場にある羽沢ガーデンの連盟関係の控室に届けて、すぐに東京プリンスホテルへ行つた。まあ、私は寿司屋の出前持のようなものだ。あの寿司は、私と安倍さんとの共同出資によるものである。また、私は、将棋連盟に行けば、寿司屋の出前持ぐらゐの器量の男になつてしまふ。

*

中島啓之さんの結婚式が盛大なものには驚いた。お嫁さんは高松調教師のお嬢様である。つい二、三年前までは、騎手の結婚式は、府中の騎手なら府中の近くの料理屋で行われるのが常だった。競馬ブームは遂にここにまで及んでいる。なにしろ、競走馬が商事会社の投資の対象になるのだから。

はるかかなたの霞^{かすみ}んで見えないような上席に森繁久弥さんと三木のり平さんがいるのがわかった。この二人は馬主である。競馬界においては、競馬場でも、そうでないところでも、馬主を大事にする。キャベジンコーワと江戸紫はギャラがいいのだなと思った。私は知人の馬が出走すると黙って見ていられなくて、馬券は買うし声援もするのだけれど、二人の持馬であるところのヒサノオーヒやウーマンリブなんて馬が勝つところを見たことがない。

私は、将棋指しや乗り役の結婚式に出ると必ず泣く。どういうわけかわからないが、勝負師というものが哀れでならない。哀れを感じるということが「好きだ」ということにつながる。たとえば、中島啓之さんは四月十一日に結婚式を挙げたわけであるが、翌日の朝の五時には、もう、調教のための馬に乗っているのである。だから、四時には起きなければならぬ。そこで大怪我をするかもしれない。そう思うと、それだけで胸がいっぱいになり涙が出てくるのである。いけないと思ったときに、すでに眼鏡が曇っていた。

中島さんの結婚式で泣くくらいだから、高橋湛さんの結婚式でも泣くだろうと思った。私の祝詞のときに、予感があつて、ハンカチを出しておいた。そうして、私は、絶句してしまった。高橋家の三男二女の結婚式はこれで終りで売り切れだから、五人の同胞^{きょうたい}は、ときどき先生の家へ行って慰めてくださいと言うつもりで、それだけのことが言葉にならない

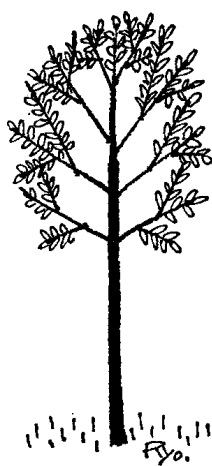
いで泣いてしまった。そのほうが形見分けのときに得だからなんて言ってしまう。

ステーションホテルの宴会場を出て、また羽沢ガーデンにとつてかえした。将棋は終つていて感想戦になっていた。控室へ行くと、大阪寿司のバッテラが三箇所だけ残っていた。それを見て、ああ終つたのだな、物事の終りとはこういうものだなと思った。

佐藤五段と真部一男四段がいたので、彼等を誘つて新宿へ飲みに行つた。そのうちに、また高橋先生に会いたくなつたので、大勢で押しかけた。佐藤、真部の兩名は、ともに羽織袴はかまであるから、謡曲の先生に間違えられ、歌え歌えと言われて困つていた。高橋先生の奥様は、何度も何度も、ご祝儀はどうしましょうかと言われる。すなわち、これ、羽織袴の一得である。飲んだり歌つたりしているうちに、また涙があふれてきた。物事の終りとはこういうものだという思いが強く強く私に迫ってくる。

今朝起きてみて、佐藤五段が家にいたのは、こういうわけのものである。私は無理に連れてきてしまったらしい。

押し寄せる春



一月の下旬に梅の枝を切って瓶びんにさしておくと、二月の初めに花が咲いてしまう。二月の終り頃に桜の枝を切って瓶にいけておくと、三月の半ばで花が咲く。

そのことを書いたら、ある人に、きみンところは花札と同じだねと言われてしまった。瓶に咲いた梅の花は、小ぶりで色が白い。桜も同じである。埃をかぶらないから色が白い。葉は鮮やかな緑色を呈する。鮮やかすぎて人工的な感じがする。八重桜の葉は茶褐色であるのに、家のなかの葉はグリーンになる。来る人ごとにそのことを言うので、女房になんべん同じことを言うのと叱られてしまった。

庭の雑木が芽をふくのは、桜の花の咲くときと同じである。そういうことがわかった。柳桜をこきまぜてというのは、その情景を歌ったものだろう。

四月の初めにバカに暖かい日があった。暑いくらいだった。そんなときに、朝早く起きて、庭を見ると、様相が一変している。ソロの新芽が一センチメートルずつ大きくなって